

題目：『深い河』－遠藤周作の再発見 „Deep River” – Rediscovering Shūsaku Endō

はじめに

2016年の『沈黙-サイレンス-』というマーティン・スコセッシによって監督された映画は世界中で、特に日本における日本史で注目を浴びた。だが、その『沈黙』の原作は1966年に書き下ろされた当時もやはり思いがけないことだったかもしれない。正確にはその40年後その真剣なストーリーを二度も生かし、大成功できたのは当然のことであるに違いない（1971年に一度映画化されたことがあるものの、今回の映画化が2000年以降の遠藤周作の作品評価に最も影響した）。その成功の影響で遠藤周作の他の作品も世人の注目の的となった。言い換えれば、遠藤周作の作品が再発見されたということである。

テーマと方法について

上述の2016年の映画の成功に関し、遠藤周作の重要な作品がチェコ語など世界中の言語に翻訳されはじめた。例えば、チェコにおいては『沈黙』の再出版（2017）をはじめ、『侍』（2018）、『深い河』（2019）が連続的に翻訳出版されたのである。

キリスト教信者である遠藤周作は作家として作品においてもカトリック信仰を発現しようとした。その行為はある意味で宣教師ともいえるかもしれないが、『沈黙』をはじめ『深い河』までバチカンから異端者として批評されてきたのである。その一生の体験をそれぞれの作品の主人公へ投影し、キリスト教をどうしても自然に日本人に伝える努力を最後の作品である『深い河』の中で仕上げたと言えよう。

『深い河』の世俗的な人物の多様性は、様々な読者を引き寄せるに違いない。また、その登場人物は全員日本人であっても、宗教的には必ずしも統一されていないということも重要である。ストーリーの目的地であるインドのガンジス川はついに宗教と信仰に関係なく全員を集約する。『深い河』の登場人物を分析し、それらを通して「グローバル化と日本学」という本年度のコンソーシアムのテーマを果たすことができると期待する。

目的と結果

本発表は現代のグローバル化は単に文化の領域だけではなく、信仰の面においても進んでいるのではないかという推測に基づく。ただし、様々な信仰や宗派は必ずしもグローバル化のようにスムーズに進歩しているとは言えない。つまり、経済的、文化的なグローバル化と違い、世界の宗教は対立し、一つの「グローバル信仰」に合併できないという意味である。グローバル化と共に非宗教論理が特に西洋で広がっているが、それでもなお、「人間というものは何よりもまず宗教的な存在である」と遠藤はその終生の作品の中で表現し、自身の人生もまた生き抜いたのである。マーティン・スコセッシの2016年の映画、また最近の様々な

言語へ新しく訳された『深い河』などその他の遠藤周作の作品に対するこのような評価は、なおこの問題や疑問が、世界中で社会の風潮を反映しているという証拠ではないかと思う。そのようなわけで、遠藤周作の「再発見」の意味を発表したいと考える。

参考文献（予備選択）

遠藤周作『深い河』（1993）講談社

遠藤周作『深い河を探る』（1994）文芸春秋

『遠藤周作文学全集』（1999）新潮社

Inoue, Masamichi. *Reclaiming the Universal: Intercultural Subjectivity in the Life and Work of Endō Shūsaku*. In *Southeast Review of Asian Studies*, Vol. 34, 2012, pp. 153-170.

Netland, John T. *Rewriting the Death of Jesus: An Intertextual Reading of Shūsaku Endō's Deep River*. In *Christian Scholar's Review*, vol. 46, no. 1, 2016, pp. 65-77.

Williams, Mark. *Crossing the Deep River: Endō Shūsaku and the Problem of Religious Pluralism*. In Doak, Kevin M. (ed.). *Xavier's Legacies: Catholicism in Modern Japanese Culture*, pp. 115–33. Vancouver: UBC Press, 2011.